

米山の北山麓の大平

横根市 小川弘（本町三丁目出身）

昨年（昭和十九年）の十月十五日に高田高校十回生の古希の会が上越市の料亭宇喜世で行われた。私も出席したが、八十人程集まって盛会であった。この文章はそれを書くためではない。高田へ行った事を枕にしたかっただけだ。

古希の会でも相当酩酊したが、その後で親しい友人O氏とY氏と三人で二次会を「終」と言う小料理屋で行った。飲むために「終」に行ったのだから、こゝでも相当楽しく飲んでしまった。高田駅前（ターミナルホテルに入ったのは翌日）になっていた。

七時半にホテルで起床して、腹筋二十五回と背筋五十回をしてから朝食を食べに行った。昨日は飲むには飲んだが、形あるものは刺し身くらいしか食べていないので、朝食のご飯をお代わりしてしまつた。減多にないことだ。

古希の会に出席した人達は、今日はゴルフをしたり、市内を散策したり、母校を見学したりするらしいが、私は上越に来たらやりたい事が前からあった。今日は単独行動でそれを実行しようと思つた。

私は昭和十九年の四月から昭和二十二年の三月まで、家族と一緒に米山の北側の山麓に位置する部落に住んでいた。部落の名前は大平（おおひら）と言う。父親が教師で、転任先が鉢崎小学校大平分校だったので、敗戦濃厚になった時期も重なって、疎開を兼ねて家族全員が大平に移った。この大平に六十二年振りに行つてみたかったのだ。

高田駅前のホテルだから駅まで歩いて一分もかからない。八時四十四分発の長岡行きに乗つて直江津に着くと古希会で会つたK氏が夫人と乗りこんできた。

何かの展示会があり、これから宇都宮へ行くそうだ。米山駅でK夫妻と別れて降りた。九時四十分。米山駅の昔の名前は鉢崎だった。駅名を何故変えたのか知らないが、乗降客はほとんどいない。降りたのは私一人だった。改札には駅員がいなかった。無人駅だ。駅前には商店もななく人影もない。何とも寂しい所に降りてしまつた感じがした。それでも駅前には幼稚園と郵便局があった。郵便局の名前は昔のまま鉢崎郵便局と看板があり、漢字の下に HASKI POST OFFICE とあった。昔通りにハツサキと読むのだ。駅前を五十メートル歩くと国道八号線に出る。大型貨物車が轟音を出して途切れなく走つていった。何かとんでもない違つた場所に来てしまつた感じがした。

駅前から米山の頂上が見えた。山頂の薬師堂も小さいがはっきりと見えた。大平部落に向かつて歩き始めた。大平部落までは約五キロ、標高差は一五〇メートル。六十三年前の四月の始めにこの道を一家で歩いたことを思いながら歩いた。今は立派な舗装道路だが、昭和十九年には雪解けのぬかるんだ道で、道の両脇に雪が残つていた。五歳になろうとしていた私には、地獄のような道だった。登り勾配の道を歩き始めると、日が射して気温も高くなり、汗をかき始め

た。上着を脱ぎ、手に持つて歩いたのだが、道は意外ときつい。一時間十分かかつて大平部落の入り口に着いた。部落の入り口までは広い舗装路が整備されていたが、部落に入ると、舗装はされておらず、昔通りの狭い道路だった。歩いている内に家も道路の曲がり具合も何となく記憶が甦つてきた。勿論、幼かった私の視線は低く、部落の道路も家も大きく見えた。今見る部落の家々は何故かみすばらしく小さく見えて、人影もなかった。

敗戦前後はこの部落出身で都会に住んでいたが、空襲で焼け出され、戻つてきた人達もおり、何処の家にも子供は三、四人はいいたので部落は何処に行つても人影はあった。今は、大平もその例外でなく、日本全国の農村で見られる過疎の老人所帯の部落になつてしまつたらしい。子供の頃一家でお風呂を使わせてもつた家の前を通り過ぎた。見覚えがあつた。その隣の家も見覚えがあつた。



私と同級生の男の子がいた家も昔の通りであった。

分校は部落の西のはずれの小高い所に嘗てはあった。訪れて見たが、校舎も校庭も消え失せ、細かく仕切られた畑になつていた。幼い目には広く見えた校庭は今見ると本当に狭い。こんな狭い所で運動をしたり遊んだりしたことが異次元の世界のように思われ、暫し佇んでいた。

学校跡地から部落へ戻ってくる途中で、先ほど通り過ぎた、風呂を使わせてもらった家の門前に立った。Mさんの家だ。表札を確かめた。当時は部落の人達は屋号で呼び合っていたが、その家は「x x x」と言う屋号だった。

「御免下さい」と大きな声で開いている戸口から声をかけたらお婆さんが出てきて、怪訝な顔をしながら、「何でしようか」と声をかけてきた。

「お宅は昔x x xと言う家ではありませんか」と言うと、そっだと応えが帰ってきた。終戦の前後にこの部落に住んでいたことのある者で、当時の事が懐かしくて寄つたのだと話したら、私は嫁に来たので当時の事は知らないが、もうじきお爺さんが田圃から帰ってくるからお爺さんと話をしたらよい。ここで立っているのも何だから家に入ってください、と言うので上がしてもらふことにした。

十一時半近くになつて来た。お婆さ

んが昼になるかどうすると言うので、昼食は持っていると言つたら、味噌汁を作ってくれた。お婆さんは胡桃パンを食べ始めたので、私も持参のサンドイッチとおにぎりを食べ始めた。

お婆さんは、鯨波（近くの漁村）から嫁に来て子供を三人育てたこと、孫達が時々遊びに来ること、娘が横浜で所帯を持っていること、等を話してくれた。互いに顔を覚えてはいるはずがない。私が当時の話をしたらMさんははつきりと思いついてくれた。終戦当時、彼は小学校の六年生で、私の父から授業を受けたことも思い出してくれた。

Mさんは、私より七歳上のこの家の長男だが、昼飯を食べながら色々と話してくれた。大平部落には昔二十四軒の農家があつたが今は僅かに八軒しか残っていない。それも老人所帯ばかりだ。おれたちが居なくなつたら、この部落もお終になるだろう。最近放棄された家や田畑が増え、昔は姿を見たこともなかった猪がこの数年出てきて田畑の被害が大きくなって来た。今年も収穫直前の稲が猪に食われてしまい、収穫は半分以下になった。県や市の援助で田畑の周りを高圧電線が囲む事になった。若い人がいないので、農家も少なくなる一方だ。俺たちは死ぬまではこの家で住む積りだ、

等々と話してくれた。

一時半になり、Mさんはこれから田圃の土起しに行くのだ、と言うので、私も辞去することにした。二時間もお邪魔してしまつた。

数年前に米山に友人たちと登つたことがあつた。但し、登山口は柿崎地区からだったので、気にかかつていた大平に足を踏み入れることはなかった。頸城平野からの端正な米山を見ながら、一度行つてみたいと思ひながら、何故か機会がなかったのだ。車で少し走れば何時でも行けたのに。

大平から米山駅までの帰りの道は日本海を見ながらの下り道だ。晴れ渡つた日本海の霧の中に佐渡ヶ島がぼんやりと見えた。長い間、一度は訪ねて見たいと思つていた所を訪れ、宿題をやり終えたような気分になりながら、駅までの道を歩いた。

佐渡ヶ島雲にかすめる暮れの秋



対米館よりの眺望 米山さん